

# 七年史

## 上・下巻

### 北原雅長輯述



錦絵「会津戦争記聞」  
(博物館会津武家屋敷蔵)

雅長亦其一人なり、相失後の事實を詳悉して、敗軍の艱難を説べし、其高草盡くるところ、深山に入る、單身荆棘高篠を分ち、偏に西北に行く、磁石器を好伴とし、懸崖は乃ち葡萄蘿を杖として下り、前岸は乃ち樹根を攀ちて上る、時已に薄暮、微雨蕭條、絨衣を透濕して、全身水中に在るが如し、腰間一足の草鞋と、數片の麴麩あり、石に踏して、溪水を掬し、僅かに空腹を慰す、尚ほ溪を越え、巖を攀る者數回、暗黒行く可らず、是に於て大樹の曲立する者を撰び、藤臺を斫て之に纏帶し、熊笹を折て其間に挿入し、漸く身を容るゝの地を作爲し、其大樹を負て憩ふ、疲勞覺むず眠るが如く、又覺るが如し、遙かに南方の天を望めば、炎炎雨雲に映じ、砲聲殷々たり、想ふに木地小屋以南村落の兵火なるべし、天漸く白し、又深山を横行して、擇ぶ處なし、苦楚難艱備さに、瘠る溪流あるに遭ふ、以爲く水末必ず平原に出で、人境に近付べしと、意を決して、溪水を歩す、行數里、溪水稍平なり、忽見る溪畔、玄木を架して橋の如きを、岸を上りて之を検するに、果して橋にして、數十人通過の跡あり、之に従て行くと、數十町、溪河幅員七八間あり、而して其前岸は全く深山を隠れて、漠々たる高峯、石筵山頭の如し、溪水股を浸し、辛うして前岸に上れば、行人の足跡、彌々多く

して、遙に茅屋を見る、之を訪ふに一人の農夫あり、荷を負ふて將に行かんとす、呼で地名を問ふ、農夫が曰く、大島原なり、余曰く、汝何處に往くや、農夫が曰く、敵已に追らんとす、故に難を避く、余曰く、敵決して此地に出でず、汝等恐るゝと勿れ、余今石筵より來る、然るに小徑數十人の足跡あり、汝其人を見ずや、農夫が曰く、軍人數十此地を過ぐ、何人なるを知らず、余曰く、空腹既に甚し、食餌あらば興へよ、農夫が曰く、只濁醪あるのみと、大椀盛來る、余之を傾くる、二椀、忽にして滿身暖を催ふし、濡衣蒸氣を發し、煙中に在るが如し、行くこと數十町にして、秋元原に到れば、人家十四五軒あり、近づくに及んで、數多の人聲を聞く、行きて之を見れば、大鳥圭介丹羽丹波田中源之進等、圍藥して、散兵と共に飯を炊き、芋南瓜蘿蔔等を煮て、喫食する處なり、相見て其無事なるを知る、余も其一飯を受て、午の刻共に秋元原を發したり。

二十二日、西軍大兵を進めて、猪苗代を襲ふ、守將高橋權太輔は、衆寡敵せざるを慮り、見禰山の祠官櫻井豐記をして、祖廟の神靈を奉じて、若松に赴かしめ、城に火して退きけり、此日、永岡權之助は、猪苗代に在りて、石筵口の敗報を聞くや、直に疾走して、若

### 内容見本

(70%縮小)

杯も、入得ぬ程の急劇の籠城也しかば、城中糧食空くして、只君家一時の食料、白米六七俵に過ぎず、勘定奉行和田勇藏大に之を憂ひ、下役人をして、二の丸の社倉を開きて見れば、四五百俵有しかば、農兵を使用して、本丸臺所前なる漬物蔵に運ばしめて、其玄米を炊き、兵食に宛たり、其后數名、糧米運輸の命を受け、近村の社倉米を運び、市街より米嚮を城中に入れ、其他食品、需用品を入るゝ者數人、奔走して、城中に運送しければ、爲めに食に乏しからざるを得たりし也けり、臼杵なども、持運來りて、搗たるも有けり、

といへる男兒と也けり、白川の役に左の股を打れて、弟の莊司も歸りて治養し、妻の房子は八月廿二日子を産みて、擽に伏し居たるに、廿三日城下に迫りぬと聞えしかば、莊司云く、皆家を出て敵を避くべし、余は歩行も叶はねば、此處に在りて腹切らんといふに、母之を聞て、盡く家に死なんのみ、いかで傷者を棄て、敵を避くるの道あらんやと云ければ、莊司はさらば駕籠に乗て、諸共に通れんとて、下男の清藏外一人をして、駕籠を舁しめ、母は壽と幸と萬之進とを誘へ、妻は赤子を懷にして、城に入らんとせしも、敵に阻られて、入る事能はねば、暫く立止まりしに、莊司水を需めければ、母立寄て見れば、腹切たる也しかば、母いそぎ河水を掬して、與へければ、吞了りて死たれど、埋むべきの迫あらねば、心ならずも棄置て、城下の西に走り出たりけり、或は寺院に宿り、空屋に寝て、辛苦至らざるなし、清藏常に從て介抱しけり、町野源之助が母は、勝子の姉なるが、我家の婦女と、町野忠次郎が家の婦女とを連立て來るに、逢ければ、共に勝方村に至りて、某寺に在りしに、町野の下男馳來りて、敵已に近付たり、御城も落たりと、風聞仕りぬと報じければ、町野の母は、敵に辱しめられんよりはとて、自害せんとす、南摩

文久二、明治元年の七年間を

一切の私情を排し

「史実」に徹することによって

会津側から克明に記述

類書にない貴重史料満載

マツノ書店



## 上 記 卯 丁 (四一)

は七葉の大輪なり。御屋根は、總て網代の栗色なるが、夕顔形にて、開き窓一つあり。御鏡戸と稱す。前面に白色の御簾を垂れ、金色の飾具を着けらる。内部は鈍色の縁を下げて御簾を鈎し、これに輪の紐を垂れ、御車の中より兩方へ下御簾を下げ、後方に鈍色の御引立二枚を敷きたるが、玉座にして、靈柩を納め奉る。烏襖は總て金色にして、轅間に狭めり。本牛を蓮華斑といひ、先牛を天翠簾といひ、其前に在るを添牛といふ。牛數は牛車の重量によりて差異ありといふ。薄暮假御門を御出あり。御道筋は、蛤御門脇なる勸修寺邸の間なる新道より、烏丸通三條東へ、寺町通五條東へ、伏見街道を御通行あり。宮及び二條攝政殿、徳川大將軍慶喜公以下文武の百官、在京の諸侯、盡く衣冠を着け、纓を巻き、徒歩青竹を杖つきて供奉せられけり。從者各數人なり。此夜天候暗黒にして、細雨袂を霑し、松明涙を照し、鹵簿肅然として、唯車輪の軋音を聞くのみなり。道路屋内皆拜送を許されければ、御道筋は立錐の地なく、數萬の人民肅寂として一語なく、合掌拜送し奉りて、嗚咽する者あり。(雅長も御道筋に坐して拜送し奉り、歌を賦せり。率牛の歩みも早き心持して御車遠く成にけるかな。)大將軍は、俄かに病ありとて供奉の列を避けて御休憩あり。大葬の夜を待ちて變を謀る者ありとの流言

## 上 記 卯 丁 (五一)

を傳ふる者ありければ、戒心せられしなりと云ふ。會津藩士は、或は白丁を着け、松明を執りて、列に加はり、又は形を變じて奉送し、數千の兵士盡く出で、路に遍かりけり。御柩泉涌寺に達しければ、布衣雑色等白衣を被り、虎落假御門より御假屋に遷して、東面に置き奉る。公卿は南頬に、武臣は北頬に併列せらる。僧正等讀經し奉りて、焼香の御式あり。大將軍は後れて泉涌寺に御出ありて、柩後を拜して御還りありけり。肥後守容保は、殊に後れて座を起ち、支坊長福寺に入りて通夜し奉り、翌日に至りて歸られけり。此日より五日間廢朝仰出されけり。

廿八日、大將軍は親書を尹宮に贈りて、宮の御參内を勧めらる。

二月朔日、大將軍は大阪に御起あり。佛蘭西人に面會せられんが爲なりけり。

五日、松平越中守定敬、稻葉美濃守正邦と共に、肥後守容保が官邸を訪はれしも、肥後守は病と稱して面會せられざりけり。二侯は大將軍の御内意ありとて、強て面會を求められしが、美濃守は筆硯を持來らしめて、携ふる所の扇に一首の和歌を書し、封緘して肥後守に贈らる。

心あひて結ひし中の友垣をあらぬ風のと隔つらん





## 名著『七年史』の復活を祝して

作家 中村彰彦

奥州会津二十三万石（幕末には二十八万石）は、徳川家の北の藩屏はんぺいと自他ともに認めた雄藩であった。二代將軍秀忠の庶子にして三代家光の異母弟にあたる初代藩主保科正之が定めた「会津藩家訓」は、つぎのように始まる。

「大君の儀、一心大切に忠勤を存すべく、列国の例を以て自ら処おるべからず」

將軍家に対しては、諸藩と同程度の忠義を励むだけでは足りないというのだ。文久二年（一八六二）、尊王攘夷運動の昂揚と朝幕関係の緊張を憂えた幕府が京都守護職を創設したとき、会津藩九代藩主松平容保まつらひに白羽の矢が立てられたのも、この「家訓」の文面がひろく知られていたためにほかならない。

幕末通には周知のごとく、同年暮に上京して公武合体の世の実現に力を尽くした容保は、鳥羽伏見の戦いに旧幕府軍が敗退するや、一転賊徒首魁として追討される運命をたどった。本書の『七年史』という題名には、この文久二年から明治元年までの七年間の会津藩の歩みを克明に記述した史書、という意味合いがこめられている。

以下しばらく、本書によって初めて明らかにされた史実をいくつか紹介してみよう。

まず文久二年の政情を語る「第一巻 壬戌しんじゆう記上」「第二巻 壬戌しんじゆう記下」は、孝明天皇が容保を上京する前から好意的に眺めていた事実じじつに言及する。「第三巻 癸亥みづかひ記一」では、上京した容保が策を用いたいと発言した家臣に対し「策略は正道にあらず」と色をなした光景が描かれる。

著者北原雅長、通称半助は容保の側近としてつねにかれに扈從こしやうしていたからこそ、後世の史家にはとても書けないこれらのことをも記述することができたのだ。

さらに「第五巻 癸亥みづかひ記三」の白眉は会津同盟の下に文久三年八月十八日の政変が成功するくだりであるが、会津両藩および追放直前の長州兵の軍装から一触即発の状況までが、実に詳しく記録されているのに驚かされる。余談ながら私は長編小説『落花は枝に還らずとも 会津藩士・秋月悱次郎』（平成十六年、中央公論新社）を執筆中、八月十八日の政変の章に至るや本書の記述をもっぱら参考にした。本書以上のレベルにある史料は、世に存在しないからである。

ついで「第七巻 甲子かしの記一」から「第十巻 甲子かしの記四」までは、池田屋事件と禁門の変（蛤御門の変）の勃発した元治元年（一八六四）の出来事をほかの巻とおなじく編年体で記述しているため、新選組も登場する。このころ会津藩が国力を疲弊させつつあったという事実の提示なども、同藩の内情に通じた者ならではの指摘であろう。

ほかにも本書には、注目すべき点が少なくない。「孝明天皇記」にすら収録されていない、孝明天皇から諸方へ発せられた宸翰が多数紹介されていること。特に天皇が八月十八日の政変によって尊讓激派公卿が一掃されたことを喜び、容保にその忠誠の心を愛でて与えた宸翰の文面が初めて活字化されたことは、北原雅長の最大の手柄でなければならぬ。これによって初めて、容保は明治以降の官製史観——いわゆる順逆史観の主張する賊徒などではなく、天皇のもっとも信頼厚い武官であったことが証明されたからだ。

なお右の宸翰が存在することは、つとにマツノ書店が復刻した男爵山川浩遺稿『京都守護職始末』（明治四十四年十一月刊）でも明らかにされた。しかし『七年史』はそれより早く明治三十七年八月に啓成社から刊行されたばかりか、約五百頁の『京都守護職始末』に対して上下巻約二千頁のボリュームを誇っていた。その意味でこのたびの『七年史』の復刻には、いよいよ真打ち登場の趣がある。

ちなみに著者北原雅長は、会津藩家老神保利孝の次男に生まれ、やはり家老職たり得る名門北原家を継いだ人物である。長兄神保修理は、鳥羽伏見の開戦前夜、最後の將軍徳川慶喜に東帰を進言した責任を問われて切腹の主命を拝受。利孝もまた鶴ヶ城への籠城戦が開始された慶応四年八月二十三日、追手の甲賀町郭門かくらが破られた責任を取って自刃し、修理の妻お雪は大垣兵に捕われたのを恥として喉を突いた。

しかるに雅長は、神保利孝・修理の死を記述する際にもふたりが自分の親族であることには触れず、主情を排した筆法に徹している。『七年史』全二十巻に凜乎たる気品が漂うのも、著者が「史料をして語らしめよ」の鉄則を良く守りぬいているからだ。

会津滅藩のち工部省に出仕、秋田県権大属ごんのだいしゅん、長崎県少書記官、初代長崎市長を歴任した雅長は、官製の順逆史観に抗し、幕末の会津藩の立場を闡明せんめいするのに最適な文体を思案した結果、右のような筆法を選択したのもと思われる。

「このような著作者の経歴からして、本書は同時代人の証言としても読むことができる」（『国史大事典』）という評があるが、この「証言」が会津藩雪冤の書の嚆矢しやうしとなった点にこそ、本書の歴史的意味がある。

前述の啓成社版、その後出された復刻版（「続日本史籍協会叢書」所収の四冊本、臨川書店刊の二冊本）も入手困難な今日、堅牢美麗な本造りで知られたマツノ書店版が世に出ることは私の喜びとするところである。